尾(お)っぽをふって、ちゅうちゅうちゅう　宮城県

むがす、むがす、あっとごぬ、昔話(むかしばなし)のうんとじょうずなおじいさんがいました。子どもたちを集めて、よく昔話を語って聞かせていました。

ある日のこと、子どもたちが、

「おじいちゃん、おじいちゃん。うんと長い長い昔話、語って聞かせてよ」といいました。おじいさんは、

「ああ、よしよし。それじゃあ、話の区切(くぎ)りでおれがひと息(いき)ついたら、おまえたち、『おーやー、そーらー、そらふくべー』ってはやすんだぞ」といいました。それから、語り始めました。

「昔むかし、あるところに、ねずみがいっぱいおる小さい島があったんだと。年ごとにねずみが増(ふ)えて、三千三百三十三万三千三百三十三匹(ぴき)になったんだと。ねずみたちは、だんだん食べ物がなくなってきたんで、みんなで、向(む)かいの大きな島に渡(わた)って行こうということになったんだと。そこで、最初(さいしょ)のねずみが、海にざんぶり入って、浮(う)―き上(あ)がって、尾っぽをふってちゅうちゅうちゅうと、鳴(な)いたんだと」

おじいさんは、そこでひと息つきました。すると、子どもたちが、口をそろえて、

「おーやー、そーらー、そらふくべー」とはやしました。

おじいさんは、つづけました。

「またねずみが、いっぴき、ざんぶり入って、浮―き上がって、尾っぽをふってちゅうちゅうちゅうと、鳴いたんだと」

「おーやー、そーらー、そらふくべー」

「ねずみが、いっぴき、ざんぶり入って、浮―き上がって、尾っぽをふってちゅうちゅうちゅうと、鳴いたんだと」

「おーやー、そーらー、そらふくべー」

「ねずみが、いっぴき、ざんぶり入って、浮―き上がって、尾っぽをふってちゅうちゅうちゅうと、鳴いたんだと」

おじいさんが、いつまでも、

「ねずみが、いっぴき、ざんぶり入って、浮―き上がって、尾っぽをふってちゅうちゅうちゅうと、鳴いたんだと」というものだから、子どもたちは、

「おじいちゃん、おじいちゃん、まだつづくのか」と聞きました。おじいさんは、
「そりゃあ、三千三百三十三万三千三百三十三匹のねずみが、いっぴきずつ海に飛(と)びこむんだから、まだまだだ」といいました。そして、
「ねずみが、いっぴき、ざんぶり入って、浮―き上がって、尾っぽをふってちゅうちゅうちゅう・・・」と、何度(なんど)も何度も、いいましたとさ。

村上郁再話

資料『むがすむがすあっとごぬ』佐々木徳夫／未来社